
悲しみは優しさを与えて

氏川将士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しみは優しさを与えて

【Nコード】

N1551K

【作者名】

氏川将士

【あらすじ】

ひとしきり泣いた後だった。泣き疲れてぼーっとしていたとき、ベッドの上に放り投げられていたケータイが、命を取り戻した様に急に光だした。正直、このタイミングで話はしたくなかった。しかし、誰からの電話か気になった。私はしぶしぶベッドまで這っていき、ケータイを手にした。

ひとしきり泣いた後だった。泣き疲れてぼーっとしていたとき、ベッドの上に放り投げられていたケータイが、命を取り戻した様に急に光だした。正直、このタイピングで話はしたくなかった。しかし、誰からの電話か気になった。私はしぶしぶベッドまで這っていき、ケータイを手にした。

電話は案の定、ニシムラからだった。

「よう。お前、また泣いてんだろ」

「泣いてない」

どうして、この男はいつもカンが良いのだろう。私の彼氏でもなくせに。枯れてしまった私の声を聞けば、私が泣いていたことなど、すぐにわかってしまうだろう。しかし、ニシムラは、そうかとだけ言っただけいつもの様にどうでもいい話を始めた。ドアに指が挟まったとか、近所のガキに馬鹿にされてキレかけたとか、この頃ヤケに黒猫を見るとか、本当にどうでもいい話。

「どうせ明日は暇なんだろ？それならどっか飲みに行かないか」

「なんで私が明日暇って決めつけるのよ」

「お前、こういうときはいつでも学校休んでんじゃん。高校のときからずっとさ」

「そうだった」

事実、その通りだったのだけど、素直に認めるのも嫌だったの知らないフリをした。その後ニシムラは、明日の10時にいつものところで、とだけ言ってケータイを切った。

どうにか目の腫れもおさまったので、私はいつものバーへと向かった。少し距離があるのだけど、なんとなく歩きたい気分だった。途中で小雨が降りだした。私はバッグから折りたたみ傘を取り出し、それを夜空へ向かって開いた。歩いていくうちに子供の頃を思い出し、何だか楽しくなってきた。私は静かな夜の雨道を、少しはしゃぎながら小走りした。

「おいおい、待ちくたびれたぞ。ていうか、なんでそんなに息切らしてんの？」バーに着くと、ニシムラは既に来ていた。この雨のためか、客はニシムラと私だけだった。

「走ってきたのよ。途中で雨が降ってきたから」

「でも、お前傘持つてるだろ」

「細かいこと気にしないでよ。あ、マスター。甘めのカクテルでなんかいいのある？」

マスターはにつこりと頷き、棚から傘の絵が描いているボトルを取り出し、氷を準備し始めた。ニシムラは既にバーボンを飲んでいて、何を飲んでいるの、と聞くと、無言でグラスをよこしてきた。

「うーん、美味しいのはわかるんだけど。名前までは分かんない」

「アーリータイムズ。わりとメジャーなバーボンだよ」

「へえ」

軽く頷いた後は、静かに沈黙が空間を支配した。しかし、それは苦痛ではなかった。雨音、ニシムラのバーボンを飲む時の氷の音、マスターがグラスにボトルを注ぐ音が空間を満たし、アンサンブルを奏でている。

「どうぞ」

アンサンブルに浸っていると、マスターがグラスを差し出していた。そのグラスには、静かで穏やかな海を連想させる、深いブルーの液体がそそがれていた。

「……綺麗。ねえ、マスター。このカクテルは何ていう名前なの」と聞くと、マスターは、明日はもう来ない、と呟くように言った。

「え？」

「だから、カクテルの名前だよ。明日はもう来ない。それがそのカクテルの名前さ」

「『明日はもう来ない』、か……。このカクテルを作った人は悲観主義者なのかしら」

「いや、ただの皮肉屋さ。一口飲んでごらん。それが答えだよ」

マスターが勧めてきたので、私は訝しげに一口だけ、グラスに口を付けた。

「……軽くて、フルーツの香りがする。これ、とても美味しいわ。」
マスターを見ると、そうだろう？ とでも語りかけてくるような瞳で私を見つめていた。

「これは私の解釈なんだけどね。身近にありすぎるモノはその価値を忘れやすいんだよ。そこに有って当たり前。これって一種の甘えだよ。特に日頃触れている、日常ってやつは特に、さ。だからこのカクテルを作った人は、今有るものは次の瞬間には壊れてしまいかもしれない。あつて当たり前ではないということを伝えようとしてるんじゃないかと思うんだよ。よく考えて見れば、あつて当たり前のももの程、大切でかけがえのないモノは無い。明日が来ることは当たり前ではない。明日はもしかしたら来ないかもしれない、と思わせることで、今という時間を大切にしなさいといってるんじゃないかな」

「もしかしたら、そうかもしれないね」

「そうさ。君にとって言うなら、彼みたいな存在だね」とマスター

はニシムラに目配せした。ニシムラはアルコールが回ってきたのか、カウンターによたれかかっている。

「もう酔ったの？ 今日随分と早いよね」

ニシムラは私の言葉に反応したのか、まだ酔ってないと呟いたが、しばらくもしないうちにそれは寝息へと変わっていた。

私はどうしようもないのでニシムラを抱えてバーをあとにした。マスターがにこやかに私達を見送った後、二人でタクシーに乗り込んだ。

「……あのさあ」

「何よ」

タクシーに乗り込んで少ししてから、ニシムラが口を開いた。

「もう落ち込むようなことはよしてくれよ。なんか、こっちまで落ち込んでしまっからさ」

「私だつて好きで落ち込んでる訳じゃないわよ」

「それは分かるけどさ……」ニシムラはそう呟き、目をつむり、深く息を吐いた後は何も言わなかった。

いや、言いたいことは他にもあるだろう。しかし、あえて口には出さないだけなのだ。そういえば、ニシムラはそういう男であることを、私は思い出した。たとえ何があるうと、困ったような笑顔でごまかす。ニシムラの両親が亡くなった時も、泣きじゃくっていたのは私で、彼はその時も困ったような顔をしてずっと私の肩を抱きしめてくれた。どんなに辛いことがあっても、ニシムラはそれを表に出さないのだ。

私は、ニシムラの強さを初めて理解したような感じがした。少しだけだけ。

「ねえ、ニシムラ」

「うん？」

「…ありがとう」

「…どういたしまして。少しは元気が出てきたか？」とニシムラは軽く微笑んで問いかけてきた。私はそれには答えず、だまって彼に肩をもたれかかった。ニシムラも何も言わなかったが、おそらく私の言いたいことは通じただろう。もう長いことニシムラとは一緒にいるのだから。

明日はもう来ない、か。

私はそのカクテルの名前を口ずさみ、まだ見ぬ明日に想いを馳せた。その明日はおそらく、これまでとは変わったものになるだろうと思いつながら、私は瞳を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1551k/>

悲しみは優しさを与えて

2011年10月3日19時18分発行